

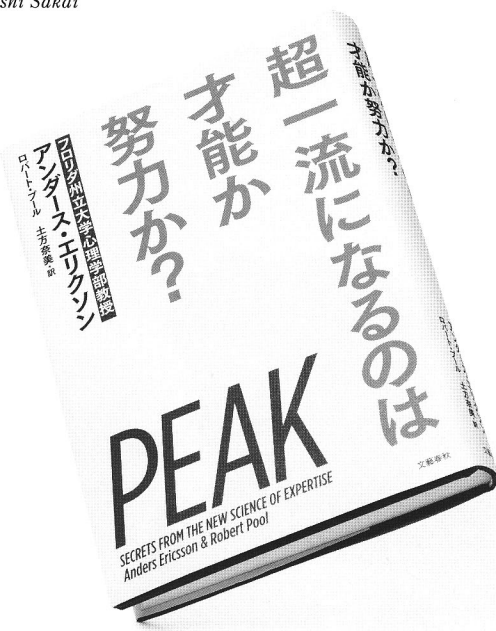
ノンフィクション

エキスパートになる秘訣とは

酒井邦嘉

(東京大学大学院総合文化研究科教授) = 文

Kuniyoshi Sakai



『超一流になるのは才能か努力か?』

アンダース・エリクソン、ロバート・プール著、土方奈美訳

文藝春秋/1850円+税

超絶技巧を駆使するヴァイオリニスト、次々と記録を更新し続ける陸上選手や水泳選手、そして華麗に舞台を舞うプリマ・バレリーナ。「超一流」の彼ら、彼女たちは天賦の才能があるのか、それとも努力の賜なのか。エキスパートたちのトレーニング過程の綿密な調査に基づき、「努力」こそが真の秘訣だと本書の著者らは結論づける。その力強

い普遍的なメッセージは、一芸を極めようとする求道者とその指導者にとつて、福音となることだろう。ただし、闇雲に努力しても大きな効果は望めない。「エリッゼのために」をどんなに繰返し練習しても、「熱情ソナタ」が弾けるようにはならないのだ。そこで鍵となるのが「限界の練習」(原語は deliberate practice)で、「計画的練習」である。これは、自分の能力の限界ぎりぎりの

ところで「あと少しだけできるはず」と考えて、その限界のさらに上を目指すものだ。そうした具体的な目標を設定して計画的に練習を続けること出、脳に眠っていた適応能力を引き出し、上達を止めることなく限界の克服を促すのである。その興味深いメカニズムは、脳科学からの解明が待たれる。

著者のエリクソンは、経済活動における意思決定の研究で有名なハーバート・サイモン(一九七八年にノ

ーベル経済学賞受賞)の弟子である。サイモンは、チェスのエキスパート

が駒組みのパターン(実際のゲーム

のもの)を瞬時に認識でき、「心的

イメージ」として記憶できることを示した。サイモンらの研究によれば、

これらのパターンは「チャンク(まとまり)」として階層構造を成して

おり、グランドマスター(世界チャンピオンに次ぐ称号)の能力を説明

するには、一万から十万に及ぶほどのパターンが必要とされる(サイモン

の論文による)。どのグランドマスターも、この膨大なパターンの習

熟に十年はかかっており、この十年という修業期間は、ヴァイオリニストや科学者など多方面のエキスパー

トに共通する。そうした努力の持続こそが、新しい組み合わせを際限なく生み出すような「創造力」の必要条件なのである。もちろん、ライバルの存在や病などの人生における不幸は避けられないから、十年の修業が「超一流になる」ための十分条件だとは言えない。それでも、才能の不足を嘆く暇があったら、自らの弱点を克服して一歩でも前進するしかないのだ。

このように考えると、いわゆる「グループ学習」は効果をあまり期待できないことが分かる。なぜなら、到達段階はもちろん、弱点や目標は人によって千差万別だからだ。たとえ「能力別クラス」を作ったとしても、各自の進度の違いからすぐに意味を成さなくなってしまうだろう。とにかく現代の教育で強調される「他者との競争」や「相対評価」ほど無意味なものはない。芸術の分野でエキスパートを育てるための鍛錬が個人レッスンを基礎としていることを踏まえて、学芸の全般において「個に徹する」ことの大切さを見直す必要がある。人間の可能性に対する示唆に富んだこの本を手に、未来の教育について考えたい。